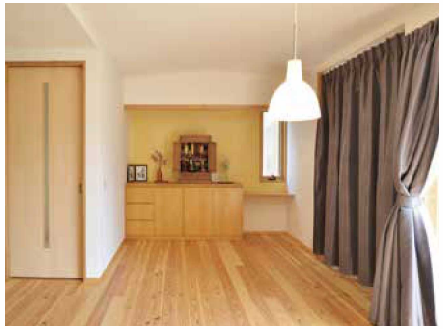
審査員特別賞
GUNMA HOUSING AWARD 2021

終の棲家

【ついのすみか】

設計者／株式会社 城越設計　　施工者／株式会社 城越設計



設計主旨 CONCEPT

桐生市中心街に近いながらも、小高い山を背にする閑静な60坪の敷地。施主は70代のご婦人で、一人暮らし。150cmに満たない小柄な風貌であるが、内に秘めた強い意思がうかがえ、ヒヤリングの度に隠れた思いが表面化してくる。要望の根源的な解決となるリノベーションのコンセプトは、なるべくして出来上がった。

『バイタリティある終の棲家をデザインする』である。コンセプトを実現するための要点は３つ。

１点目は、自然素材を活かすべく全てのバランスを調和させること。１階の間仕切りは全面撤去し、快適な光と風の通りを計画。リビング、キッチンをオープンにし、東面・南面に開口部を確保。平面と高さのプロポーション、家具のディテール寸法など細部に渡る。

２点目は、活かすために捨てるデザイン。利用のない暗い玄関は撤去し、階段スペースへと変更、およそ28度の緩やかな勾配の階段を実現させた。２階の個室をインナーバルコニーに変更し、寝室の前に配置。内と外の中間領域となり、体感的な落ち着きをもたらすと共に、夏の日射遮蔽にも有効的となる。不必要な個室は全て取り壊し屋根裏とした。

３点目は、住みながらの大規模なリノベーションである。キッチン、トイレ、浴室の水廻りを全て移動する計画とした。施工において、工区分けが可能となり、Ａ工区に新規浴室を造作→その後、Ｂ工区の既存の浴室を解体→そこに新たにキッチンを造作→Ｃ工区の既存キッチンを解体し、仏間へ変更。といった風である。これで、工事中に水廻りが使えない問題が解消された。

最後に、騒音や振動、第三者（職人）の出入り等、改修工事の難しさを緩和すべく、施主の仕事場であるアトリエは、一切手をつけないこととした。織物産業が盛んな桐生で生まれ育った施主は、ひたすらミシンと向き合う洋裁を仕事にしてきたという。そんな彼女の心臓部であるアトリエをしっかりと守りながら、工事は完成を迎えることができた。完成後も伺う度に、元気な笑顔を見せてくれる。聞けば、庭を掘り起こして小さな家庭菜園を始めたとの事。終活という言葉が浸透する現代だが、終の棲家は決してひっそりと籠るものではない。アクティブにエネルギッシュであるべきと考える。

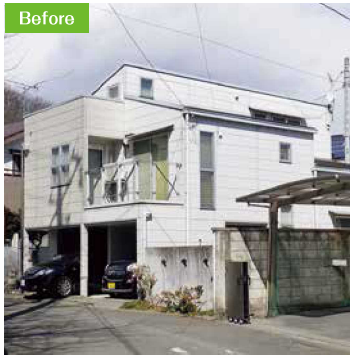
平面図

講評 REVIEW

閑静な街区に佇む住宅の持ち主は、お一人で生活される70代のご婦人。

住み続けた住居をこれからの時代と暮らし方の変化に順応させるべく大胆なリノベーションにより多くの問題点を解決しました。また、住みながらの大規模な工事は工区分けをし、生活に必要な水廻りを機能移転させながら維持させることで、実に１年半にも及ぶ工事となりました。

建築主の依頼と要望を様々な制約の下で具現化した設計と施工は、大変なエネルギーの伴う作業であったと伺えます。それは建築主との高い信頼関係により実現することとなりました。

活かすために捨てるデザインを徹底し、自然素材を多用した豊かな内部空間は家主の五感に響くプロポーションとなり、大胆な減築により生まれ変わった外観は正対する桜並木と呼応し、あたかも従前からその場に在ったかのような佇まいを見せてくれます。

暮らし方、住まい方の優良事例として。また、既存住宅の長寿命化やロングライフ化の成功例として、優れた取り組みに対し審査員特別賞を授与いたします。